「名刺管理か、お祓いか」

●名刺の管理と「名刺納め祭」

TBSラジオの帯番組『森本毅郎·スタンバイ!』(月～金、6:30～8:30)の「現場にアタック」のコーナーで、『捨てられない名刺·捨てられる名刺』という特集がありました。

年末は、大掃除など身辺整理に励んだ方も多いかと思いますが、捨てられないのが、頂いた名刺です。日本人の9割が、名刺を捨てられないと、ある調査結果を報じていました。

調査をした名刺管理サービスのSansan株式会社の小池亮介(りょうすけ)さんによると、「名刺というのはただの紙ではなく、ビジネス相手を投影して、大事にとっておく文化が日本では根強く残っている」とのことでした。多くの日本人は、名刺を物理的な紙や情報とは受けとめず、そこに相手の人格を反映して受けとめているために、無下(むげ)に捨てることに違和感を感じている人が多数いることを改めて教えられました。

さらに興味深かったのは、東京湯島の神田明神という神社では、2017年の歳末に初めて催したという「名刺納め祭」です。これは、名刺を捨てられないでいる人びとのための、名刺のお焚き上げの行事だと思いました。取材を受けた神田明神の神主さんの説明では、納められた名刺を「お清め、お払(はら)いをします。来年1年の願いと、今年1年の感謝をお参りしていただく、祈願祭」だそうであり、当日は、神職による祈祷もされるとのことです。

●無自覚だが大切にしている自然宗教

明治学院大学名誉教授の阿満利麿(あまとしまろ)先生は、『日本人はなぜ無宗教なのか』(1996年、ちくま新書)で、日本人の宗教観を考える場合、従来の民族宗教と世界宗教(あるいは普遍宗教)という分類ではなく、自然宗教と創唱宗教という分類が適切だと説いています。

この自然宗教とは、日本社会に自然発生的に生まれた宗教ということです。明確な教祖も教義もありませんが、習慣や習俗などを通して伝えられている宗教です。無自覚な信奉者によって支えられ、しかも、いつの間にか自分もそれを受け入れ伝えている宗教だというのです。

年末年始になると普段、関心のなかった寺社にお参りし、受験合格の祈願·祈祷、春秋彼岸に墓参り、七夕で願い事、お盆の先祖供養など、先のお清め、お祓いもこのような自然宗教ということになるでしょう。

一方、創唱宗教とは、創唱者である教祖がいて、特定の教義をもち、その教義に自覚的に生きようとする信奉者から成り立つ宗教のことです。

この創唱宗教は、その教えを求める心がなければ、そして、ある一定の期間、学び勤めようとしなければ成り立ちません。

多くの日本人は、自らを無宗教といいますが、実は自然宗教の無自覚で、しかも熱烈な信奉者であることが多く、また、日本人のいう「宗教」とは教義を掲げる創唱宗教のことのみを想定している、と阿満先生は論じています。そういえば、初詣にでかけても、「あの人は宗教に関わっている」と思われませんし、また、自分が無宗教という時は、「特定の創唱宗教に関わっていないということ」を暗に示していることになります。

●私の姿を見つめる

さて、先ほど神主さんの説明を紹介しましたが、これを聞いて、「名刺納め祭」をすると名刺がお清めされるとか、何かがお祓いされるのだと賛同し納得する人が日本には沢山いるのだと思いました。そうです、無自覚だけれど熱心な自然宗教の信奉者がいて、お清めやお祓いという宗教行為を認め、依り所にする人びとがいるということです。

しかしまた、今、この文章を読んでいるあなたは、浄土真宗という創唱宗教を求め、それを大切にしようとしているのではないかと思います。

そしてよく考えると親鸞聖人の教えを生きようとしている一人ひとりの心の中にも、自然宗教の姿と創唱宗教の姿の双方が重なりあっているように思いました。人により、状況により、そして、教えの学びの深まりにより、その姿は変化するようにも思います。

現代の最先端のネット社会で名刺管理サービスの会社の事業分析を、古代から続く自然宗教のお清めやお祓いと重ねてラジオ番組が紹介するところに私たちの社会の気づきにくい自然宗教の姿があるように思いました。

さて、皆さんは、この私の文章を読んで、宗教ということをどのようなものだと感じているでしょうか。阿満先生の定義は、日本社会の姿だけでなく、この私の姿を考えさせて下さるように思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料·茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「雁の枝と風呂供養」

●雁木で思い出すコマーシャル

「雁木(がんぎ)」という名の日本酒を頂戴したことで、40年程前のテレビコマーシャルを突然思い出しました。

それは、コピーライターで、作家だった山口瞳さんが、青森県の海岸を訪ね、北の地から遥かに飛んできた雁たちの咥える枝の話をする浜の漁師たちを紹介するものです。

北の国からの長旅を続けた雁たちは、それぞれ、疲れを癒すため一本ずつ、海上で休みを取るための「浮き」になる枝を咥えて飛んでくるのだそうです。

そこから海上の旅のなくなる雁たちは、その枝を浜に置いて、秋から春、日本の上空の旅を続け、春に再度、同じ浜に戻った時、自分の枝を咥えて、北の地にかえるのです。

ところが、数多くの枝がその浜に残ります。それは、春から秋に、いのち尽き、あるいは、人に捕まった雁たちの枝なのです。浜の人たちは、その雁の「いのち」を思い、遺された枝を集めて風呂を焚き、不運な雁たちを偲んだといいます。

焚き火を背景に、ウイスキーを口にした山口瞳さんのナレーションが最後に、「哀れな話だなあ、日本人て不思議だなあ」と重なります。あくまでも、私の記憶です。

●落語「雁風呂」

ところで、最近は、ネットで何でも調べられるという便利な(あるいは、少々、妙な)時代になり、このコマーシャルは、YouTubeの動画で今でも見ることができました。すると、そこから三遊亭圓正(えんしょう)さんの「雁風呂(がんぶろ)」につながりました。

懐かしい老練な語り口に引き込まれ、あっという間に最後の落ちに至りました。これによって今まで知らなかった感銘を受けることになります。それは、「雁風呂」の内容は、風呂を焚くなどCMと重なりながらも、また別の多くが語られていました。

落語「雁風呂」では、道中の水戸黄門様が、大坂の豪商、淀屋辰五郎の二代目辰五郎と静岡県の掛川の茶屋で巡り合うところで語られます。店に不似合いな有名な絵描きの画いた屏風絵を、その人が水戸光圀公とは知らず、辰五郎が絵解き、説明をします。

短いCMでは語られていなかったのは、その「雁風呂」は、生活の困難な者や修行僧に振る舞われるというくだりでした。圓正さんの落語では、雁の追善供養のために、布施の実践をするということが要となるわけです。

●空のコップと施し

亡くなった雁の供養のために、そして、苦しみ悩む多くの他者に布施、施しをすることが重要だという発想は、大乗仏教と無関係ではないように思いました。私がお手伝いさせていただいている、アーユス仏教国際協力ネットワーク(http://ngo-ayus.jp/)も同じ精神をもとにして、海外で活動する日本のNGOに支援をしています。

他者の利益(利他)に生きることは大乗仏教の基本であり、親鸞聖人も、信心とは願作仏心の自利と度衆生心の利他であるとお示しです。

ところで、初代淀屋辰五郎は、人びとのために今は淀屋橋といわれる橋を架けて中之島への利便をはかり、また、多くの貧民に大金を使って慈善事業をしていたといいます。

過日、こんなことがありました。年回法要のお斎(とき)の席で、業者が故人の遺影の前に空のコップを置いていましたが、お施主の方は、故人はビールが好きだったけれど、コップにビールをつぐのは真宗らしくないですねといい、何もつぎませんでした。このお施主は聞法求道(もんぽうきゅうどう)の志篤(あつ)く、人びとにも教えを弘めています。そしてこのお施主の祖父は、巨万の富を動かす事業家でしたが、深く真宗の教えに生き、真宗を学ぶ多くの学徒に、そして、念仏が弘まるために施し、ご寄付をしていた方だったと思い起こし、深い生き方に思いを巡らせました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「どちらを向いているのか?」

●お供えの花

仏様の前のお供えの花は、なぜ、こちら向きなのでしょうか?

人は、花がそこにあることで穏やかになったり、温かな気持ちになったりしませんか。花のいのちの姿を通して、支えられたり、なぐさめられたりするからだと思います。

そういうことから、花を贈るのは、相手に対する親愛の気持ちの表れということになります。親しかった人との別れの後に、花を仏壇やお墓に供えるのも、ごく自然な心の動きでしょう。こちらから、相手に花をお供えし、亡き人を偲び、敬う訳です。

しかし、仏様のお供えの花はこちら側だけの気持ちを表しているのではなさそうです。なぜならば、お供えの花は向こうにではなく、私に向いています。これは、そのまま、私に向けられている如来さま、仏さまのお心でもあると教えてもらったことがあります。

必ず、花はいつか枯れていきます。それと同じように、私たちのいのちも、限りがあります。すべてどんないのちも、かけがいがないということを花を通して亡き方や如来さまは、教えてくれていると受けとめる世界もあるのではないでしょうか?

さらに、花は人生の無常を教えてくれますが、同時に、今の私のいのちが、亡き人を始めとして多くのいのちに支えられ、はげまされていることにも気づかせてくれます。

お仏壇に花を供えるのは亡き人や如来さまから、今も人生の大切なことを教えてもらっていることを表しているのです。それで、花はこちらに向いています。このようなことから、供える花は出来る限り季節の生花を心を込めてお供えする訳ですね。

●同じ方向を押しつけるのか?

こちらから向こうを向いて、こうすべきだと思っているとき、自分の主張だけを絶対化していることがあるかもしれません。

歴史の中で、多くの宗教は、この宗教だけ信じなさい、この宗教にだけ向き合いなさい、という「掟」を人びとに強いてきたように思われます。そしてまた、人びとも、宗教とは、結局、何かを絶対だと思い込む「掟」に従うことだと思っているようです。

ところが、普遍的な宗教の本質は、そのような絶対化を強要しないということだと私は学びました。つまり、今、自分が向き合っている世の中の出来事を、これが間違いないと決めつけないで、人間の都合が作り上げた世の中だから、依り所にならないものを抱えているのだと、相対化していく生き方を教えているということです。

親鸞聖人のお言葉といわれる『歎異抄』第二条にも見られます。

> 「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々。」

念仏によって人間を成就する仏道を歩んだ人の言葉です。聖人は、念仏を選び取るか、捨てるか、それは、皆さんがたのそれぞれのお受け止めに任せるしかありません、とのべています。

私が学部生の頃、仏教の基本である「五戒(ごかい)」(不殺生(ふせっしょう)・不偸盗(ふちゅうとう)・不邪淫(ふじゃいん)・不妄語(ふもうご)・不飲酒(ふおんじゅ))は、誰かから強いられるものではなく、仏教徒として生きようとするとき、自らが進んで誓う生き方であると学んで、大変深く驚いたことがありました。(戒は、自戒ともいい、押しつけるものではないのです。)

向こうに向かって、こうすることが絶対だと思い込んでいた自分が、根底から気づかされ目覚めることで思いもよらぬ心が育ちます。それは、私の思い込みを相対化してくれるものに出遇うこと、それが、仏道を歩むところに開かれるまことの生き方の確かさでしょう。

外からの掟ではなく、私のいのちそのものに生まれるまことの目覚め、まことと出遇うという体験に生きることは、それまで体験したことのない厳しさと安らいが生まれます。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳(本多 静芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「行いを同じくする事」

●オリンピック知ってますか?

「ロヒンギャの難民の殆どは、平昌で冬季オリンピックが開催されていることを知らない。」

という報道をラジオで聞きました。

録音もしていなかったのですが、私にはこのように聞こえました。さらに、世界にはオリンピック大会の存在さえ知らない人びとがいることも知りました。

国連の勧める持続可能な開発目標（SDGs）の報告によると、世界人口の約10%の最富裕層が全世界の所得の40%近くを占めています。

つまり、世界の約90%の人びとが所得の60%を分け合っています。所得の不平等の高まりは、紛れもない事実で、最貧層が世界の全所得に占める割合は、わずか2%から7%にすぎません。

こうした富の格差などをもとに、オリンピックを知らない人びとがいることを頭の中で想像することは可能なことです。しかし私は、ラジオの放送で知るまで、そのような人びとがいること、そして、そういう世界に自分が生きていることを考えてみることもありませんでした。

●知らなかったことを知ること

世界にはさまざまなNGOやNPOの活動があります。

浄土真宗本願寺派には「ジッポウ」という組織が設立されていますが、私はそれ以前からNGOアーユス仏教国際協力ネットワーク（以下、アーユスと略します）に関わり続けています。

アーユスは、「仏教精神に基づき、市民·NGOとつながりすべてのいのちが尊重され生かし生かされ合う社会の実現を目指し」、「世界のさまざまな現実に目を開き、貧困や不公正、環境破壊など、平和と人権に関わる問題」に取り組んでいます。

具体的には、世界で活躍する様々な団体を支援し、また彼らの情報を伝えることで、「遠い国であっても私たちと決して無縁ではないという気づきを開く」国際的な支援活動をしています。

私はアーユスとの関わりを通して、同じ出来事でも、異なる側面から見ると、全く気づきもしなかったことが見え、それが、自分の新しい動きにつながることを教えられました。たとえば、支援活動というと何かをしてあげることだと思っていた心は、根底から打ち砕かれました。むしろ、知らなかったことを知ることで、意外なことに新たな姿勢が開かれ、私も他者によって支えられているという謙虚なものの見方が恵まれることがあります。

●同事

相手のいのちを、私と同じだけ、かけがえのないものだと実感するのが仏教です。それで、お釈迦様の時代から、慈しみの態度を大切なこととしてさまざまに説かれてきました。

そのひとつが「同事（どうじ）」で、相手と同じところに立って、同じ行ないをしながら、慈悲をもって相手の力となり、我執（がしゅう）を超えて尽くすことをいいます。

例えば母親が子どもにスプーンで食べさせようとして、「はい、アーン」と言うとき、自分も同じように口を開いて向き合っていますが、同事とは、そのようなあり方をいいます。

親鸞聖人は、鎌倉時代、社会の中で、「石」のように足蹴にされた人びとを自分と変わらぬ行いをする「われらなり」といわれます。

「れふし·あき人、さまざまのものはみな、いし·かはら·つぶてのごとくなるわれらなり（生き物を殺す漁師も、売り買いをする商人も、さまざまなものもみな、われわれは石や瓦、礫（つぶて）のようなものなのです）」
『唯信鈔文意（ゆいしんしょうもんい）』『註釈版聖典』708頁

猟師の行いで魚や肉を食べられる、商人の行いで日用品に恵まれる、だから、自分と相手は同じところに立って、同じ行いを共にしている「われら」だと実感されているのです。

教えに出遇えてよかったと思うのは、私が救われることだけではないようです。

自分の思い上がりや、人びとのかなしみを知らずにいたことなどを知ることができたのも教えに遇えたからだと思いました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「異質なモノを通して開く世界」

●浄という言葉

村上春樹さんの『騎士団長殺し』を読んでいると、アーノルト・シェーンベルク作曲の弦楽六重奏曲「浄(きよ)められた夜」を思い出しました。

この曲は、第一次世界大戦に参戦し、負傷しながら童話や劇作も手がけた、ドイツのリヒャルト・デーメル(1863～1920)の詩をもとに作られた表題音楽(情景や風景、気分や雰囲気といった標題を意識して音楽を聞いてほしいという、作曲者からの注文が加えられた器楽曲)ともいわれるものです。

月光のもとに、深い課題を抱えた男女の会話が綴られます。

女は言います。

「私は子どもを身ごもっているが、あなたの子ではない」こと、そして、「希望を失っている」こと。

それに対して男は言います。

「子どもを重荷にしてはならない、闇と影の見えるのは貴女に光がある証拠なのだ、子どもを僕の子として産んでほしい」と。

二人は夜道を歩んでいく、という内容です。

高校時代、繰り返しこれを聞いた頃には気にも止めていませんでしたが、のちに浄という字の由来に、争いを水に流すという意味があると知りました。「氵(さんずい)」は、水に関する部首です。

戦争という暴力は人に、都合を超えた「思いもよらぬもの」と向き合わせると思いました。

●悲しさを通して出会う

親鸞聖人の曾孫、本願寺第三代の覚如(かくにょ)上人(1270～1351)、その長男の存覚(ぞんかく)上人(1290～1373)の作といわれる『親鸞聖人正明伝(しょうみょうでん)』に、親鸞聖人二十六歳の逸話があります。

洛中で新春の用事を終え、京の街から延暦寺に帰ろうとすると、延暦寺の麓、結界にあたる赤山明神で、身なりのととのった女性から、仏さまのお慈悲に会わせて頂きたいので、是非、お山に登らせて欲しいと声をかけられます。

親鸞聖人が、ここは女人禁制の寺であり、お連れすることは出来ないと答えられると、比叡の山を開いた最澄さまほどのお坊様が、「一切衆生(いっさいしゅじょう)、悉有仏性(しつうぶっしょう)(あらゆるいのちあるものには、仏になる可能性があるの意)」の教えをご存じないのでしょうか、山に帰る鳥や獣にはメスはいないのでしょうかとその女性は悲しみ訴えられたという話です。

「いのち」の平等を知りながら、気づかぬままに、女性を異質なものと排除する従来の習慣や常識に振り回されているのは、人ごとではないかも知れません。

伝統を学びながらも、まったく平等の「いのち」だから共に救われるという、それまで「身ごもる」ことの無かった新しい世界観、すなわち浄土真宗が、日本の仏教に新風を吹き込み、今や世界にも影響を与えていると感じます。

しかし、それは従来の仏教から見れば、異なる側面、異質な側面を持つものでもあったということです。

●異質なモノ

私たちには、自分の都合を満たそうとする潜在的で先天的な心のはたらきがあります。仏教は、人間の心を深く見つめて、それを「我愛(があい)」の心と示しました。

私たち自身に、そして、私たちの作る社会には、都合の悪いもの、異質なモノを排除すれば自分の描く通りに世界は調和がとれて、美しくなるという考えがあります。

しかしそれらは、優生主義、民族浄化、そして、歴史修正主義につながることを現実の歴史を通して学ぶことができます。むしろ、異質なものと共にあるところに、気づかなかったことに気づかされ、多様性を尊重していく社会は生まれます。

五月は、戦前の「教育勅語」とは異なる、多様な世界観を認める「日本国憲法」、「平和憲法」をこのような角度から向き合ってみてはどうだろうと、私は思っています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「心が育つ～念仏の信心」

●「コップの水理論」

「コップに『半分入っている』と『半分空である』とは、量的には同じである。だが、意味はまったく違う。とるべき行動も違う。世の中の認識が『半分入っている』から『半分空である』に変わるとき、イノベーションの機会が生まれる」（P·F·ドラッカー著／上田惇生訳『イノベーションと起業家精神』ダイヤモンド社、2007年より）

確かにその通りなのですが、私には、少し優等生の答えのような感じのする、教訓的なことばに聞こえます。

ところで、親しいお酒好きのあるご住職が教えてくれた味わい深い法語があります。

「人生一生　酒一升　あるかと思えば　もう空か」

この法語は、まだたくさんあると思っていたお酒のビンが、いつの間にか空っぽになっていくことを教えてくれます。酒好きの人間には、身をもって実感できる事実だというわけです。

●同じものが変わって見える

親しい方が亡くなったあと、残された人が、「ああすればよかった、こんなことを言わなければ……」と、誰にも言えない思いが残ることがあります。こんな話を聞いたことがあります。

ある住職の通夜·葬式の法要に、喪主としてお参りされた息子さんが、心の中で、このような人に言えない様々な思いを抱えていたせいか、落ち込んでいました。

それを知らず心配した総代さんが、

「これだけ大勢の方がお参りされるのも、ご先代のご人徳ですよ」

と、慰めとも思える言葉で褒めてくれました。息子さんは、お念仏を称えつつ、やがてだんだん心が育てられました。

「総代さんの言葉はありがたいです。しかし、それだけではないように思えました。むしろ父は、これだけたくさんの方々に支えられ、見守られ、今日まで無事に生かされてきたのではないでしょうか。
そう思えると、ご会葬くださる皆様に、自然に頭が下がりました。また、この心の方が、亡き父に本当に喜んでもらえるのではないかと思います。
そしてこの私も、今まで多くの人の温かな眼差しに支えられていたと気づきました」

亡き方を仏さまと仰ぐとは、どういうことかを教えてくださるお話しだと思いました。

親しい方の死に向かい合うと、私たちは気持ちが動転し、混乱します。

それでも、参集された方がたと共に、手を合わせ、亡き方と向き合う尊いご縁に恵まれます。すると、亡き方を通して、み仏さまのお慈悲に、私の心が育てられます。それは、まったく同じ出来事でありながら、今まで気づかなかった角度から見つめられるようになり、私自身の心が深められます。

「亡き方の人徳」というのも間違いない事実ですが、そこにモノの見方が転じられ、「これだけの支えがあり、生かされてきた」という心が恵まれます。

●心が育てられる

亡き方と向き合う仏事のお参りで、私の称える念仏を通して、実は、「人生の大切なことを見落とさないように」と、仏さまから、呼びかけてくださっていた念仏だったと聞こえる実感をいただくようになるでしょう。

仏さまの教えは、人間にとどまらず、あらゆるいのちあるものとつながり支えられていることを気づかせてくれるものです。

そして、念仏もお経も、生きている私たちに「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」とおさとりの仏さまから呼びかけられている慈悲の言葉と味わいが深まります。

教えを求め聞いて、念仏を生活習慣行とすれば、自分一人の力で生きているのではなく、生かされている私だった、そして、おかげさま、ありがとうございますと、報恩感謝の私が育てられます。お互いに仏事を、心を育てられ、目覚めさせていただく行事にしましょう。

今月は、万行寺の前住職の祥月です。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「経験や体験～信心のしるし」

●年齢の違い～体験が異なる

「6月も終わり、ことしも半分。お正月から、あっという間だったね」と小学生に語りかけると、「そんなことないよ。お正月は、ず～っと前で、そのあと、いろ～んなことがあったよ」という“意外”な返事が返ってきました。

年齢によって時間の経過の感じ方が違う現象は、19世紀の心理学者により「ジャネーの法則」として指摘されています（哲学者ポール･ジャネが発案し、甥の心理学者ピエール･ジャネの著書で紹介されました）。

「主観的に記憶される年月の長さは年少者にはより長く、年長者にはより短く評価される」

つまり、子どもの頃の時間は長く感じられ、大人は短く感じるということです。例えば1歳の子にとっての1年は全人生の長さですが、61歳（私）の大人の1年は人生のおよそ1／60の長さです。これをもとに計算すると、私の1年という長さの感じ方は、10歳の小学生に換算すると約60日にしか感じていないということになります。

これは、その人の生きてきた経験や体験の違いによって、同じことを受け止める実感も相手とは大きな違いが生まれるということになります。

すると経験や体験がまだ少ない子ども（あるいは大人の人びと）には、大人（それを経験した人びと）の受け止めかたを想像することができないし、逆に相手のことをおかしなものの見方だと一方的に思いこみ相手を理解することが出来ないことになります。

けれども、それを経験したり体験した大人だと、子どもの受け止め方を想像したり、あるいは、かつて自分も分かっていなかったと振り返ることができれば相手を責めることなく、いずれ相手も経験や体験を通して変化･深化していくだろう、と考え直すことができるように思います。

●ハラスメントの体験から考える

2014年6月18日、東京都議会本会議で「自分が早く結婚したらいいじゃないか」、「産めないのか」と複数の発言者の「ヤジ」があり、それに対して有権者や納税者から抗議がありました。海外メディアなどではこれはセクシャルハラスメント（性的嫌がらせ）の段階ではなく性差別（犯罪）であると報道されました。

2018年5月9日、財務省は前事務次官がセクハラ問題で辞任したことを受けて幹部を対象にセクハラ研修を開きました。講師をつとめた菅谷貴子弁護士は「財務省の感覚と世の中の常識が非常にズレている、大きく乖離がある」と厳しく指摘しました。その証明として、大臣は辞職もせずに居続けています。

私が本願寺派の研修で学んだことは、嫌がらせ、又は差別という行為がもし起きた時は、先ずそれ以上、誰かを傷つけない二度目の差別（セカンドハラスメント）が起こらないようにすることです。そして、そのために誰が差別を起こしたかを特定し、どのように人を傷つけ、なぜその行為によって傷ついたのかを誰もが分かるように説明することが急務です。それで二度目･三度目の差別という加害（犯罪）を回避していく方向性が示せます。

人を傷つけたという自覚、つまり経験や体験を持たないと、私たちは平気で人を傷つける行動を繰り返します。

例えば都議会議員は内容についての処罰もなく責任も取らぬまま「謝罪」をし、時の財務大臣は「はめられて訴えられているんじゃないかとか、世の中にご意見ある」と語ったことなど、被害者の立場やその体験に心を寄せることのない発言が残されています。これでは何の問題解決にも繋がっていないし、被害者に負担をかけていると感じられました。

自分は相手を傷つけているのではないかという自覚を経験し体験することがないなら、再発防止に向けての意味合いがまったくないと私は考えています。

私は人を傷つけた、あるいは私は人を傷つける可能性を未だ未だ持っているという自覚の経験を持って向き合うことがないままなら、「ヤジ」や「はめられた」発言に問題がなかったかのように見過ごされ、今日も明日も繰り返されるでしょう。

私は思います。自分の至らなさを経験をした人は、経験していない人を見下して批判するのでなく、それはかつての自分の姿だったという思いを通すからこそ問題を共有しあうことができるのでしょう。

しかし、それは相手に妥協するのでなく、自分の経験に基づいて一人ひとりのいのちを丁寧に見つめる新たな仏教的な生き方、それは真宗の人にとっては親鸞聖人の言葉にある「信心のしるし」（宗教的な目覚め体験をしたなら、その人なりの新しい、真宗的な社会に対する、それらしい生き方）（『親鸞聖人御消息』）を生きるということにつながると思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「挨拶～相手を思う心が育つ」

●信号待ちで挨拶

　数年前の8月11日の夕方、広島市郊外の歩道のない道で、信号待ちをしている車が数台並んでいました。その中の1台の乗用車の右後部座席の窓が開いているのが遠目にも見えていましたが、まっすぐ前を見ながら、その脇を歩いて通り抜けようとした時でした。小学校1年生くらいの女児が、可愛らしい声で、「コンニチハー!」と、私に声をかけました。私も間髪を入れずに、「あらぁ!
　こんにちは」と返事をしました。
　それだけの出来事でしたが、突然の挨拶に、とても心が明るく、豊かな気持ちになりました。挨拶ひとつだけで、私の心の中にいろいろなことを生みだしてくれました。
　広島市安佐北区周辺は、大型スーパーやコンビニなども並び、都市型化した地域になりつつはありますが、まだまだ田畑もたくさん残っていて、住宅街と一言で片付けるには、無理のある地域です。
　私は東京に暮らしていますが、毎年8月のその時期、同地にある親戚の寺に、(東京の感覚からすれば)ひと月遅れのお盆のお参りのお手伝いに出かけています。初めて、広島でお参りの手伝いをした年は、昼間、あぜ道を歩いていた自分が、その同じ夜、最先端の近代空間である羽田空港にいることに、とても不思議な違和感を持ちました。
　しかし、最近はそうした感情の動きがなくなっていたので、この見ず知らずの女児の挨拶に新鮮な感情を思い起こしました。

●いのちを開く挨拶

　挨拶という言葉は、仏教の禅で使われていた言葉です。
「挨拶」の「挨」は、相手に向かって軽く押していくということ、「拶」は、強く確かめるということだと私は学んでいます。
　禅の仏道を求めようと精進修行する人びとに対して、近づき向き合って、あなたはまことの仏道を歩んでいるか、その道を開いているか、と問われ、それに対して、私はこう受け止めていると、しっかりと確かめることが、挨拶ということでした。
　そういえば、浄土真宗の盛んな土地のひとつといわれる石川県の山村では、つい最近まで人が道で出会うと、
「後生の一大事、夜明けしたかや!」
　という挨拶があったと、松本梶丸住職がNHKの「こころの時代」で紹介されていました。
　つまり、「あなたは、この世で一番大切な問題である、『後生の問題』、つまり、いのちの一番大切な問題、念仏の信心を開くことができましたか」ということです。
　禅と浄土の違いはあっても、挨拶で繋がり合うところがありますね。
　ふだん、自分のいのちや、ましてや他人のいのちの問題など考えることもない現代人には、このように相手のいのちの課題、それはそのまま自分のいのちの課題を問い確かめ合うような挨拶があったということは、想像を絶するのではないでしょうか。

●相手とつながり、自分を育てる

　挨拶は、今では相手とのコミュニケーションのツールという意味ですが、それは同時に、相手との関係性をさらに深め、お互いの生き方を見つめていく通路でもあります。それによって人は、いのちを認め合う、仏教的人格態度が育っていくといえるでしょう。
　広島市の安佐北区は、2014年8月、広島市内の各地域と同時に、土砂災害に見舞われました。その出来事によって、女児との、ほんの少しの出遇い、「こんにちは」という挨拶を交わしたことが不思議と心に刻まれることになりました。
　あの子は、災害の晩、どこにいたのだろうか、いまどうしているのだろうか。その気持ちは、NGOの活動で出会ったあの国のあの人は、あの子は、いまどうしているだろうか、という気持ちを思い起こさせます。
　あの夏の挨拶は、私に相手を思う気持ちを育て続けてくれています。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳(本多 静芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「一水四見～私の見ている世界」

●あんな人とは思わなかった

犯罪行為や、個人間のトラブル、反社会的な出来事が起きた時、「あんなことをする人（びと）だとは思わなかった」というコメントが、日常的な会話で交わされ、また、ニュースなどの報道でもみられるように思います。

多くの一般的な人びとの行いは、ある側面から見ているかぎり、折り目正しく、また、善良で倫理的なものと見えるように思います。

一方、権力や暴力に立つ人びとの行いは、ある側面から見ていると横暴で一般常識に欠けて見えることもあるように思います。

私たちは、案外、相手を先入観でとらえて、この人たちならば、こういうことをするものであり、あの人たちならば、あんなことをするものだという「日常的な」ものの考え方に振り回されているのではないかと考えるようになりました。

なぜなら、「あんなことをする人（びと）だとは思わなかった」といっている自分の内面を掘り下げると色々なことを考えさせられるからです。

しかしながら、この言葉を使っている時、「思い違いをしている私」だったとか、「人をきちんと見つめることのない私」だということを殆ど考えません。

そして、自分の今までの判断が正しく、さらに、思い違いの出来事が起きたあとでも、その自分の判断は正しいというところに立って、手のひらを返したように、「あんなことをする人（びと）だとは思わなかった」と言っています。

同じ人を目の前にしながら、その時々の状況で、私の判断は変わっています。しかも、そのような判断をしている人間が集まってこの社会を形成しているのですね。

●一水四見

一水四見（いっすい し けん）は、仏教の深層心理学ともいえる唯識（ゆいしき）の言葉です。

一水（いっすい）、つまり同じ水を見ても、四見（し けん）といい、魚（水中の生き物、畜生（ちくしょう））の立場なら「棲みか」と見え、満足を知らぬ餓鬼（がき）の立場なら炎の燃え上がる「血の膿（うみ）」に見え、人間の立場なら「飲み物」に見え、天人の立場なら、地上の池が「宝石で出来た鏡の床」に見えるというのです。

餓鬼、畜生、人間、天人、みな、六道輪廻している私たちの心の姿のことで、つまり、迷いの立場ということですね。

そこからこんな歌がうまれました、

「手を打てば　鳥は飛び立つ　鯉は寄る　女中茶を持つ　猿沢の池」
（猿沢の池は、唯識を学問する奈良の興福寺にあります）。

以前、「世の中には、なんて沢山の妊婦さんがいるんだろう、と自分が妊娠してみて、はじめて気づきました」と、大学の「教え子」から、教えて頂きました。

自分の関心が生まれた時、見えていなかった物事が、見えてきたというわけです。ものごとを平等に見ているつもりでも、実は、自分の関心に合わせて見ていた、いや、ものごとは自分の都合で見ているのですね。

●「いい天気」「悪い天気」

以前、雪山隆弘（ゆきやまたかひろ）先生の『お茶の間説法』（百華苑刊）で、「いい天気」「悪い天気」と言っているけれど、気象庁では、晴れていれば「晴れ」、雨が降っていれば「雨」と呼ぶのだと教えて貰いました。日照りが続けば、同じ雨も、「良いお湿り」となりますね。

「あの人はいい人」、「あの人は悪い人」と、私たちは決めつけてものを見たり、考えたり、発言したりしていますが、こうして「一水四見」の教えに出遇うと、本当は、私にとって「都合のいい人」だったり、「都合の悪い人」だったのかもしれませんね。

これは人間のものの見方ですから、そのまま、人間の作り出す社会のものの見方、歴史観にもつながっています。つまり、「いい国」「悪い国」というのも、そのまま、私の国の体制にとって「都合のいい国」「都合の悪い国」なのかもしれません。

あるお寺の掲示板に、

「憎い人など　一人もいない　憎いと思う　私がいるだけ」

という言葉がありました。もしも自分の都合にしがみついていると、辛い思い、苦しい状況、憎しみ合いから抜け出せずにいるままです。

1971年の大ヒット曲、「あの素晴しい愛をもう一度」（作詞:北山修･作曲:加藤和彦）も、この視点から見つめ直すと大切なことを教えてくれているように思えます。人びとに受け入れられる歌は、同じ出来事を深く見つめる眼を大切にしていたのです。

いのちかけてと　誓った日から
すてきな想い出　残してきたのに
あの時　同じ花を見て
美しいと言った二人の
心と心が　今はもう通わない
あの素晴しい愛をもう一度（繰り返し）

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「皆様と共に～つながる生き方」

●「みなさまの未来へ出発、進行!!」

2018年のことです。二つの駅の掲示板に掲載された手書きのメッセージがネット上で注目を浴びました。これは、遠く離れた地域で放送されるラジオ番組（「森本毅郎スタンバイ」TBSラジオ、月～金、6:30～8:30）でも紹介されていました。

まず、3月18日、JR山陰本線･鳥取駅のメッセージは、「卒業生のみなさまへ」という言葉で始まります。

「大雨、強風、大雪、不発弾、動物との接触……様々な原因で列車の運行が乱れ、通学でご利用のみなさまには大変ご迷惑をお掛けしました。
ICカードも使えず決して便利な駅ではなかったかもしれません。それでも、毎朝元気な表情で登校されるみなさまの姿は私どもの心の糧（かて）になっていました。いつもありがとうございました。
学生生活を終えられ、県外へ進学･就職なさる方も多いと思います。みなさまが鳥取を離れても、私たちはいつでもみなさまのお帰りをお待ちしています。みなさまの未来へ出発、進行!! ご卒業誠におめでとうございます!!　鳥取駅一同」

次に、4月10日、新年度に合わせ、福井県のJR福井駅のホワイトボードには、新生活を始める人びとに、ICカード導入に触れ、次のように書かれていました。

「これからは改札口でお会いすることが少なくなるかもしれません……。
より一層皆様の身近に寄り添えるあたたかい駅を築いていきたいと思います。皆様と共に、出発進行!!　JR福井駅社員一同」

●同じ視線で

世知辛（せちがら）い世の中、自分の権利を主張して、相手を責め、対立することが当たり前になっている現代社会で、こうした報道にはホッとする気持ちが生まれました。

私は、これらのメッセージは、相手と同じ視線に立っている、いや、むしろ、相手を尊重して、しかも謙虚な姿勢を抱えていると思いました。

「大雨、強風、大雪、不発弾、動物との接触」などなどあったけれど、私たちはしっかり運行してきましたよ、どうです凄いでしょ!、と主張するのでもなく、ICカードが導入されたから、皆さんどうぞ上手に使ってくださいよ、という押しつけがましさでもありません。

「毎朝元気な表情で登校されるみなさまの姿は私どもの心の糧になっていた」と御礼の気持ちをあらわし、そして、「改札口でお会いすることが少なくなるかもしれません」という言葉に、経済性や合理性にほんろうされている私たちに、忘れていた生き方を教えてくれているようで、そこに共感を生みだしているのでしょう。

特に、2019年10月は、新しい消費増税率が導入され、また、政府が押しつけがましく、軽減税率は凄いでしょうという広報にうんざりしているだけに、ことさらです。

●共にという生き方

親鸞聖人の手紙を拝見していると、「～しあう」という表現がなんども、なんども出てくることに大変興味をもったことがあります。数え方にもよりますが、43通あるお手紙の中で、約40回ほどになります。

その使い方は色々な側面に見られますが、お念仏の仲間に向かって、往生にふさわしい行いや、ふさわしくない行いとして、お互いに行う、あるいは、お互いに行わないようにお示しになるものです。

そこには、念仏のお仲間に向かって、上から目線で説き伏せるような書き方は見られません。さらに、念仏のお仲間を弾圧する、つまり「念仏をそしる」ような人びとが、阿弥陀仏のご本願にお出遇いになるようにお互いに「おぼしめあはば」（お思いになるのなら）、それは、阿弥陀仏のご恩に報いることになりますよ、とお示しです。

私の思いですが、仏のご本願に出遇いながら、一人でいると、つい自分の都合で行い、語り、思ってしまうのが私です。しかし、同じこころざしを持つお念仏のお仲間と共にいて、行いを共にすること、共にという姿勢が、私にとっても大事なことであり、また、関わりのある人びとにとっても大事であることを教えられます。

参考までに～以下、親鸞聖人のお手紙の一部です

ただひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏の御恩を報じまゐらせたまふになり候ふべし。よくよく御こころにいれて申しあはせたまふべく候ふ。

ただ誤った考えにとらわれた世間の人々の幸せを願い、阿弥陀仏の本願に導こうとお思いになるのなら、それは仏のご恩に報いることになると思われます。よく心を込めて互いに念仏するのがよいでしょう。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「思い通りにすること～本当の喜びとは」

●『火の鳥～未来篇』

2018年11月、生誕90年を迎えた故･手塚治虫さん作、『火の鳥～未来篇』の話です。

「タマミは、不定形の異星生物ムーピーでした。
ムーピーたちは、どんな宇宙環境にも合うように自分の身体を変化できました。
さらに自分を庇護してくれる人（地球人）の意識に合わせて、過去のどんな時代や場所にも、まるで今そこにいるかのように、その人をウットリとさせる幻覚作用を起こすこともできました。
それで異星人でありながら、人間の姿をとって外形的にも、陶然とさせる精神作用で社会的にも認められ、地球で生き残ることができました。

3404年、自然環境は汚染され地下都市で暮らすようになっていた人びとは、希望を失い、ムーピーを飼い、思い通りのムーピーゲーム（先に述べた幻覚状態）を楽しみ、文化はデカダンス（退廃的）に向かいました。そのため、国家は法によってムーピーを飼ったり、ムーピーゲームを禁じます。

しかし、都市ヤマトに住む人類戦士マサトは、若い女性の姿をとったムーピー、タマミを隠し飼っていました。
二人（?）の関係は、時空を超えた恋に落ちていたのです。」

中学･高校生時代、私は、宿題が残っている夏休みの終わり頃になると『火の鳥』を引っ張り出して開き、まるでムーピーゲームに没頭するマサトのように『未来篇』の世界に入り込んでいました。

●YouTubeというゲーム

ところで最近、YouTubeで往年のヒット曲を聴いていて、次から次へと停まらなくなり、いつか思い出の中にいました。
インターネットで、時空を超えて思い通りに情報を得て、ある一定の時間、そこに身をひたす行為は、ムーピーゲームに似ているように思いました。

人間は「思い通り」になることを求めて文化を作ってきたようです。
それは個人の懐古趣味というようなことでなく、現在を生きながら、過去の記憶を（それは自分が作った思いかもしれませんが）確かめたがっているようです。
そして、現在を生きながら、未来に向かって、自分の思いを想像します。

人間の「思い」は、自分の分別や計らいで、自分のまわりを、都合に合わせて分類し、都合の善し悪しを決め、都合がかなうよう想像し、そうなるように工夫していないでしょうか。
現代の表現なら「分析し、判断し、予測し、統御する」ことで、身のまわりに起こる出来事を、自分の「都合のよい」ものだけで作り上げていこうとします。そのように思い通りになる要素を集めていけば豊かになる、幸せになれるという発想です。
ところが、自分の思いが、満たされても、何か、もう一方の自分は満たされず、落ち着けないものが残ってしまうように感じました（夏休みの最後に、コミックを読んで終わったという焦燥感もそれです）。

●思いがけぬことを受け容れる「ゆるさ」

随分前に、NHKのラジオ深夜便「こころの時代」で聞いたお話しです。富山県のある真宗寺院の床の間に、踊っているような、稚拙なカナ釘流の字の掛け軸があるそうです。
「思うようにならざることをよろこばん」
ある男性門徒が長年の仏法聴聞の末、ある時、いのちの事実に気づかされ、それこそその感銘を一気に書いたのです。

普通は、思い通りになることが「よろこび」ですが、その人はいのちの事実に目覚めて、驚き、その感動の余りに書き付けたのです。
思い通りになることだけを求めていると、若く、健康で、生きていて、好きな人と一緒で、嫌いな人とは関わらず、財産や社会的な肩書きが身に具わっていることが「よろこび」だと考えます。
老いや病、死すべき身に目覚めることや、親しい人との死別、挫折や失敗は、一般的に見ると無駄で、無ければよいことです。
では、このような経験することが果たして人生にとって、無ければよかったといえるでしょうか?

私は自分の人生で避けて通れない「思うようにならざること」をどう受けとめているでしょうか。
私の思いこみを破るのは私の分別の思いや計らいではなく、思いを超えた具体的な事実、思いを超えた働きかけに出遇って、はじめて気づかされます。
仏教では、事実のことを「如」といいます。普段、気づかなかった事実、つまり、「如」が私のいのちに届き、そのことを目覚めさせ、気づかせる「できごと」を、如来と呼びます。如来とは、「もの」ではなく、「できごと」だということですね。

「火の鳥』では、タマミと一緒にいたいという、思い通りになることを求めたマサトは、法や世間の倫理を破ることで、やがて思いもよらぬ様々な苦難や壁に向き合いながらも、新たな世界観を恵まれるようになります。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「平和を願う心～仏さまの願い」

●日米開戦の12月に思う

12月8日は、成道会(じょうどうえ)といい、お釈迦さまがおさとりを開かれた日として、世界の仏教徒が心を寄せる日です。

しかし、その日は日米開戦の日でもあります。

敵国にも自国にも大きな悲しみ苦しみを与えた“アジア太平洋戦争･昭和の十五年戦争”を始めた時、多くの仏教教団は国に賛同し、積極的に戦争協力もしました。

もちろん、戦争反対を叫ぶ仏教徒もいましたが、数は微々たるもので、仏教学者ですら戦争遂行を進めるための「戦時教学」をつくり、結果として、戦争という、人を殺すことで問題解決する道を容認しました。

当時、「神国日本は必ず勝つ」という「神話」が軍部によって喧伝(けんでん)されたり、アジア人の解放のためだと言って情報が操作され、すべての事実が人びとに伝わらない側面がありました。

第二次世界大戦のドイツの戦争犯罪を裁くニュルンベルグ裁判で、ヒトラーの側近、ヘルマン･ゲーリング(1893～1946)は、

「政策を決めるのはその国の指導者です。そして、国民は、つねにその指導者のいいなりになるように仕向けられます。方法は簡単です。
一般的な国民に向かっては、われわれは攻撃されかかっているのだと伝え、戦意を煽(あお)ります。平和主義者に対しては、愛国心が欠けていると非難すればいいのです。このやりかたはどんな国でも有効です」

と証言をしました。

いつの時代の国も、戦争を始める為政者(いせいしゃ)の意識は似ています。

●軍隊を放棄したコスタリカの平和教育

2006年7月6日、参議院議員会館で開催された「憲法改悪を考える集い」で、コスタリカ大学教授のカルロス･バルガス･ピザロさん(米州人権裁判所弁護士)の講演を聞きました。

コスタリカでは、平和教育を大切にしています。当日、その紹介ビデオを観ました。

小学校の生徒と先生のやり取りの場面が印象的でした。

「子どもの権利は何?」
「教育を受けること、愛されることです」
「国を愛することは義務?」
「義務ではありません」

本多靜芳のカメラで撮影

また、中学2年生には、

「国家を統治している多くの人々は、一つの似通った嫌な考えを持っています。権力を失うことを恐れています」

と教えています。今、日本では、このような視点が生まれにくくなっていると思います。

ピザロさんは言いました。

「私達の国は、1949年に軍隊を廃止し、軍事予算を教育、福祉、医療に回しました」
「コスタリカは子どものころから徹底して、平和文化教育･民主主義教育がなされます。
一人ひとりの人間性を大切にする思想、話し合いによる解決の方法、国際社会の現状を広く理解し、政治はみんなでつくり上げていくものだという教育が行われます。
だからこそ、争いごとも話し合いによって解決していけるのです」

●兵戈無用(ひょうがむよう)～兵も武器も用が無くなる

現代の日本はどうでしょう。

「原発は絶対安全」という「神話」が、東日本大震災の影響により発生した福島での事故直後にも再び主張され、再稼動が進みます。それに対して全日本仏教会は、2011年12月、「原子力発電によらない生き方を求めて」という宣言文を発信をしました。

翌2012年6月30日、東京新聞は、大飯(おおい)原発再稼動に反対する市民行動をする東京都杉並区の34歳の主婦の発言を1面に載せていました。

「今声をあげなかったら、子どもから『なんでお母さんとお父さんは私たちの未来を守ってくれなかったの?』と言われるかもしれない。子どものためにも行動しなくては」

私も、お釈迦様の「殺してはならない、殺させてはならない」という『法句経』のお言葉と「兵戈無用(ひょうがむよう):仏の教えの生き方が弘まるところには、兵隊も武器も無用になる」という『無量寿経』のお言葉を依りどころにし、依りどころにしてはならない人たちや考え方を見届ける、真の智慧を大切にしたいと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。